ウズ（ル）の談話機能

坪　井　美　樹

[要　旨]

中世末期ウズとウズルの両形態が共存したことについて，両形態がどのような機能の差を持って共存したかを論ずる。また，それに付随して，当時ウズ(ル)と意味的に対をなしていた否定推量の助動詞マイとマジイの両形態の分布についても論ずる。

ウズとウズルについて，談話機能表示の観点から検討を加え，両形態の担う談話機能の違いを明らかにする。終止法に使われるウズとウズルは，聞き手への働き掛けの強弱の差を持ち，発話の継続・終了の表示に関わる。ウズは聞き手への働き掛けが比較的弱く発話途中の文末に多用され，中止法的にも使われるのに対し，ウズルは聞き手への比較的強い働き掛けを持ち，発話の終了表示に使われる。

次に，マ(ジ)イについて，ウズ(ル)と意味的に対をなすものの，マイとマジイとの差は，文末表示⇔発話末表示の差とは言えないことを明らかにする。話し手の言表内容に対する捉え方の差がマイとマジイの形態の違いに表れているものであると考える。

＊キーワード…ウズ(ル)　マ(ジ)イ　談話機能表示　文末表示　発話末表示

[語の形態を表示する際の括弧の意味について]

本稿では議論の対象となる語の形態をカタカナで表示するが，その際，（　）で表示されるものは，その括弧内の音節が付く形態と付かない形態の両方存在することを表すこととする。また，〈　〉で表示されるものは，その括弧の直前の音節とその括弧内の音節が交替する場合があることを表すこととする。例えば，ウズ(ル)は，ウズとウズル両形態をまとめて表し，ム〈ウ〉ズは，ムズとウズ両形態をまとめて表す，といった要領である。

0 はじめに―ウズとウズル

ウズ⇔ウズルそれぞれの使い分けが問題となるのは，中世後半期から近世極初期における口語的文献資料(抄物・キリシタン資料・狂言)における終止法・連体法の用法についてである。この問題については従来種々の発言がなされており，それら先行研究の観点はおおよそ次のようなものである。

① それぞれの形態の意味＝文法的機能の差異として捉える観点
例えば，キリシタン資料や狂言における終止法ウズを対句的表現における旧終止形の残存と捉える立場がある（京1995など）。[注1]

② それぞれの形態の待遇価値・文体上の価値の使い分けとして捉える観点
例えば，終止法においてウズルはウズよりも丁重ないし尊大な表現であると捉える立場がある（山内1964,1989など）。

③ それぞれの形態の使用を文献の資料性の問題として捉える観点
例えば，キリシタン資料における連体法ウズルを当時の口語の状態とは異なる特殊なものと捉える立場がある（大塚1966）。

しかし，先行研究の多くは，それぞれの形態の使い分けを文献上の書記言語の問題として考察するだけで，口頭の音声言語においてウズとウズルがどのような機能を持っていたかという検討にまで踏み込んでいないように思われる。そこで，本稿では，文献上の書記言語の背景に存する音声言語の状況を可能な限り想定しつつ，談話内での談話機能の分担の在り方がどうであったか，という観点からウズとウズルを論じてみたい。本稿の立場は，先行研究の中で山内1964(山内1989に再録。以下引用等は山内1989から行う)に最も近い。山内1989は，待遇価値・文体価値の問題としてウズ⇔ウズルの分布を考えるだけでなく，談話機能の面から，

> （終止法の）ウズは発言の中途に多く用いられる。前文から後文へと対比し添加し展開する文脈の中に位置する。ウズルは発言の終わりにあることが多く，発言を軽くとめたり，言い収める性質がある。(p139)

と言っている。本稿は，まず談話機能と文法機能との関わりについて考察を加え，基本的にこの山内1989の指摘を資料上に追認する。

1 談話機能の表示

言語によるコミュニケーションを〈談話（discourse)〉という単位で考え，

その〈談話〉の構造を考察する研究（談話研究・談話分析）が近年盛んである。この研究は主に現代語について進められ，日本語の歴史的研究において行われた談話研究はほとんど見られない。それは，音声言語によって行われる〈談話〉というものの本性上やむを得ないことである。しかし，過去の日本語においてもコミュニケーションは〈談話〉によって行われていたのであり，文献に残された書記言語においても，（特にそれが口語的文献である場合）〈談話構造〉の持つ諸特徴は反映されているはずである。逆に言えば，必要な文献操作を施したうえで文献上の書記言語を〈談話〉として分析することも可能であり，有意義な研究であるに違いない。本稿では，ウズとウズルの使い分けに関連して〈談話〉中の文末のありかたについて考えてみたい。

〈談話管理〉の観点から言えば，発話者にとって発話中の文末は，発話途中の場合（つまり，発話がまだ終わらず新たな文が後続する場合）と，発話末の場合（その発話者の発話はそこで終わり，次の発話は自分以外の者に譲り渡される場合）とで大きな機能上の差異がある。発話途中の文末は，いわば文法構造上やむを得ない休止であり，時に他者による発話順番（turn）の奪取を許さぬよう間を置かずに後続文に連続するものでもある。それに対して，発話末の文末（この〈文末〉は文法的に完全で完結している文末である必要はない）は，そこで自分の発話が終結したことを聞き手へ伝え，自分の発話の趣旨をあらためて聞き手に印象付け，発話順番を聞き手に譲り渡すことを理解させなければならない。そのため，発話途中の文末と発話末の文末とではその在り方に違いが見られる。音声言語におけるイントネーションやピッチその他の音声上の様々な違いは，書記言語として書かれた段階で消えてしまう。しかし，発話途中・発話末それぞれに特有な語彙や文法形式や語形が存在する場合，話し言葉を文字化したような口語的書記言語ではそれなりに文献上に残るはずである。本稿は終止法のウズとウズルをそのような談話機能を分担した形態として見ようとするのである。

ただし，〈文〉という単位のまとまりは文法的に決まっており，自由な延長や短縮を許さないところがあるが，〈談話〉ないし〈発話〉という単位のまとまりはきわめて可変的であり，コンテクスト次第でどうにでもなるところがある。或る文末が発話途中であるか，発話末になるかは，発話主体の意図とは別に結果としてどちらかになるケースも多いのである（例えば，発話主体はまだ発話途中のつもりでも，聞き手によって発話順番を奪取された場合は，その途中の姿が結果的に発話末にならざるを得ない）。したがって，次節以下の検討

のように，発話途中の文末形式と発話末の文末形式を採集し，帰納的にそれぞれの特有の形式を探る場合，その結果は厳密に法則的な結果にならず，あくまで傾向として現れることとなるだろう。

以下の用例調査は，中世後半期から近世極初期における口語的文献資料のうち，ウズとウズルの両形が使われていて，談話資料としての性質を持つ狂言資料とキリシタン資料を考察の対象とする。抄物資料はそもそもウズル形の出現が少なく，狂言資料・キリシタン資料と異なり基本的に対話の形が出現しない。独特の講義調文体であり，〈談話〉の観点からの検討にそぐわない。用例調査においても，終止用法を〈発話途中文末〉と〈発話末〉に分類することは不可能であり，無意味である。したがって，抄物資料は本稿では取り上げない。

2 狂言資料におけるウ〈ン〉ズ（ル）の分布とその分析

まず最初に狂言資料を取り上げ，ウ〈ン〉ズ(ル)の用法を検討する。狂言資料を最初に検討する理由は，狂言の詞章が対話で成り立っているため，最も自然談話に近い談話資料として扱えるだろうと考えるからである。もちろん，「自然談話に近い」と言っても，もとより観客に聞かせるために作為されたものである。現代の演劇脚本ほど演技者への束縛は強くないにしても，或る程度固定され伝承される台本としてその〈自然〉さは限定的であることを考慮して取り扱うべきであることは言うまでもない。

狂言資料の『虎明本狂言台本』と『狂言六義（天理本狂言台本)』の二種について，ウ〈ン〉ズ(ル)の用法を分類して表にしたのが下表である。終止用法における〈発話途中文末〉とは同一話者による後続文が後続する文末例であり，〈発話末〉とは同一話者による後続文が後続することなく，他者に発話順番が移っている場合の文末である。前節で述べたごとく，発話主体が意図した発話末と実際の発話末は必ずしも一致しないから，計数調査上の〈発話途中文末〉と〈発話末〉それぞれの用例数は発話主体の意図を忖度することなく機械的に集計した数値である。

表① 狂言資料におけるウ〈ン〉ズ（ル）の分布

語形	用法		虎明本用例数	狂言六義用例数
ン	終止用法	発話途中文末	0	1
		発話末	0	0
ズ	準体用法		1	0

ンズル	連体用法（名詞修飾）		0	2
	終助詞類への接続（～カ）		1	0
ウズ	終止用法	発話途中文末	63 59	73 62
		発話末	4	11
	ウズラウ		2	0
	終助詞類への接続（～ヨ，～ヤラウ）		3	2
	連体用法（名詞修飾）		4	2
ウズル	終止用法	発話途中文末	113 34	16 0
		発話末	79	16
	終助詞類への接続（～カ，～ゾ）		44	3
	連体用法（名詞修飾）		13	8
	接続助詞類への接続（～アイダ，～ホドニ，～トコロデ，～ガ，～ヲ，～ニ）		32	5
	準体用法（～ナリ，～ニテを含む）		32	1

＊調査範囲…虎明本狂言＝全巻，狂言六義（天理本狂言）＝上巻（全体の約半分）[注2]

この用例調査から読み取れることを以下に例示を加えつつ記述する。狂言資料の様相についての先行研究は，蜂谷1971（蜂谷1977に再録）があり，本稿の調査結果も観点は異なるものの蜂谷の指摘に違背するものではない。また，ンズ（ル）の形は用例が少数なので以下の考察では無視することとし，もっぱらウズ（ル）について議論する。

（a）　文末の終止用法と対比する必要上，先に連体用法についてまとめる。連体用法（名詞修飾）においてはウズルの方が多用されていて，本来連体形に接続する接続助詞類及び終助詞ゾへの接続例と準体用法を加えれば，連体形としてのウズル使用が圧倒的と言ってもよい。連体用法に限って言えば，ウズとウズルの違いは基本的に文法機能の違い（ウズルは連体用法に立ち，ウズは立たない，という意味で）である。表ではウズの連体用法の例が両資料に数例ずつ見られるが，これらはいずれも特殊な使用例であり，虎明本の4例（どぶかっちり・瞽女座頭各2例）狂言六義の2例（猿座頭の抜書）ともにいずれも〈平家節〉を語る詞章中に出てくるものである。

・抑，一の谷の合戦敗れしかば，源平互いに入り乱れ，逃ぐる者の，踵（きびす）を斬らるゝ事もあり，かゝる者の，頤（おとがい）を斬らるゝ者もあり，忙わしき時の事なれば，踵を取つて頤に付け，頤を取つて踵に付けたれば，生は

よふず事と，踵に髭が，むつくりむつくり　と，生へたりけり，冬にもなれば，切れうず事と，頤に皺あかがりが，ほつかりほつかりと切れたりけり

（狂言六義　猿座頭抜書　＊虎明本の用例もほぼ同じ）

（b）　次に，終止用法においては，ウズが発話途中の文末に多用されるのに対してウズルが発話末に多用されている点が注目される（『狂言六義』では終止用法のウズルは発話末にしか現れていない）。

・（閻魔王）「…子細があらはかた（語）れきかふ　（政頼）「中々子細の候，かたつてきかせ申さうずる（閻魔王）「いそいでかたれ（虎明本狂言　政頼）

終止法ウズは次の例のようにほとんど中止法的に使われる例も多く，この点否定の助動詞ズや指定の助動詞ナリと似た点を持つ。

・…今からは，よろづ何に付けても，談合致さうず，中をも，良ふ致さうと存る，…（狂言六義　賽の目）

終止法ウズルは発話末に置かれ，聞き手への強い働き掛けを示して発話をしめくくる。また，口頭の談話とは性質が異なるが，高札の文面の言い納めにも多用されている。

・…此三年以前より，参宮を，せうすと思ふたれ共，…（中略）…此度は，俄に参らふずると，申されて，…（狂言六義　素襖落）

上の例では，先に主人が自分の考えを太郎冠者に告げるところではウズが使われ，後で太郎冠者が主人の伯父に主人の意向を伝えるところではウズルが使われている。ウズルによる言い納めの重々しさを利用したものと言えようか。

3　キリシタン資料におけるウズ（ル）の分布とその分析

第二の文献調査として二種のキリシタン資料を取り上げる。この二種の資料は対話のみで成り立つものではないが，キリシタンの日本語教科書として当時の日常会話の実態と大きくは乖離しないものとして作られていると考えられる。ただし，教科書として工夫されている分，逆に自然談話の場合とは異なる作為性及び規範性が加わっているであろうし，『平家物語』の場合は原〈平家物語〉の影響も加わっていることが予想される。そのような留保を加えたうえで用例の数値を解釈すべきであろう。

表②　キリシタン資料におけるウズ(ル)の分布

語形	用法		エソポ物語用例数		平家物語用例数	
ウズ	終止用法	発話途中文末	44	26	128	93
		発話末		18		35
	ウズラウ		0		10	
	終助詞類への接続（～カ）		0		1	
	連体用法（名詞修飾）		0		4	
ウズル	終止用法	発話途中文末	46	2	149	5
		発話末		44		144
	終助詞類への接続（～ゾ，～カ）		1		26	
	連体用法（名詞修飾）		34		156	
	接続助詞類への接続（～ホドニ，～モノヲ，～ガ，～ヲ，～ニ，～バカリ）		4		19	
	準体用法（～ヂャを含む）		1		39	

＊調査範囲…キリシタン版エソポ物語・キリシタン版平家物語ともに全巻調査[注3]

狂言資料の場合と同様に表の数値から読み取れることを以下に記述する。

（a）　連体用法においてはウズルの方が多用されていて，狂言資料と共通の傾向を示す。つまり，連体用法に限って言えば，ウズとウズルの差は基本的に文法機能の差である。

平家物語に次のように連体法ウズの例が見られる。狂言資料の場合と違って特殊な詞章中に現れるのではなく，むしろごく普通の文体中の連体ウズ使用である。日本語教科書として，稀に使われる文語的連体ウズを意図的に残したものであろうか。[注4]

・それは比叡の山を攻められうずためと聞いたと，こともなげに言はれたとき，…（平家物語　p21）

・…おくだりの時も何とぞしておん供をつかまつらうずことでござったれども，…（平家物語　p62，ただし〈こと〉の原文表記〈eoto〉と誤る）

・わづかの竹の編戸であれば，あけずとも押し破らうずことはやすからうず．（平家物語　p104）

・…今さら恥ぢうずことでなけれども，前世の宿業が口惜しうござる：（平家物語　p301）

（b）　終止法の場合，基本的に発話中の文末にウズが，発話末にウズルが使わ

れている。

・「…御座をも不浄になし奉らば，いよいよお煩ひの元ともならうず。しからば，罷り帰って身をも浄めて参らうずる」と言ひ終ってから，…（エソポ物語　p467）

エソポ物語では，〈下心〉の発話末（文章末）にも終止法ウズが結構使われている（5例）。〈下心〉は教訓として客観的に述べるもので，聞き手に対する話し手の主観的語りかけとしての働きは弱い面があるからであろう。

・下心。仁者を友にせう人は，悪い者に遠ざからずんば，必ずその名も，その徳も亡びうず。（エソポ物語　p473）

・下心。追従ばかりで，人を諂ふ者の言ふことを信ずるな。その言葉の下から，大事が起こらうず。（エソポ物語　p474）

発話中の文末に使われる終止法ウズルの少数の例を見てみると，文体的にやや特殊な場合に使われることが多いようである。

・「今日より御辺を主人と敬はうずる。かの鳶といふは賤しい無道人が，我らを侮り卑しむれば，頼み奉る」（エソポ物語　p455）

これは鳩たちが鷹に合力を頼もうとしてへり下った物言いをしている場面で，

・「…いざさらば，今度は我らが一門先を駆けて，軍を始めうずる。各々跡を黒めさせられい」と，さも頼もしげにののしって行けば，…（エソポ物語　p461）

これは鷲が仲間の鳥たちを力付けている言葉で重々しい言葉遣いになっている。発話末のウズルと同じほど強く聞き手に対して断言する言葉であり，ウズによる発話途中の文末終止とは異なる印象を聞き手に与えるものであったのではないだろうか。

また，次に掲げる平家物語の発話途中の文末終止ウズルの例は，

・…いちいちに召し捕って尋ね沙汰いたさうずる：それをば君も知ろしめされまじと申せと，言はれたれば：…（平家物語　p23）

・…またことととふ人もなうておぢゃらうずる．北の方の心のうちはまことにおしはかられてあはれなことでござる．（平家物語　p34）

・その儀ならば，北面のともがら矢をも一つ射ようずる侍どもにその用意せよと，ふれい：（平家物語　p43　ただし，原表記ピリオドなし。文脈としては切れる）

・…まっ先をかけて討死をつかまつらうずる：それにとっては実盛もとは越前の者でござあるが，…（平家物語　p172）

・大将さだめて進み出させられて；傾城を御覧ぜられうずる，その時手たれをもって射落とさうずるとの儀でござるか，…（平家物語　p335）

発話順番（turn）は変わっていないが，いったん言い納めてその後改めて発話を続けるといった調子なのであろう。ウズと違って対句的表現の前項の例はなく，軽く後に続くような軽快な会話で用いられてはいない。

なお，次の例は心中思惟の例（〈と思う〉の類の語句が後続する）であるが，その末尾はウズルになっている。必ずしも話相手目当てでなくてもウズルが使われる例と言えようか。ただしこの発話者は前後の発話で全体的にウズルを多用しているので，荘重な語り口を示す文体的な問題かと思われる。

・…ひとまづ都を落ちうずると思ふと，言はれたれば，…（平家物語　p192）

4　ウズとウズルについてのまとめ

それぞれの形態が表示する機能の違いは，おおむね次のようにまとめられる。

〈連体法ウズと連体法ウズル〉

談話機能表示上の違いは見受けられず，狂言・キリシタン資料ではウズルの方が連体形として普通に使われている。

〈終止法ウズと終止法ウズル〉

ウズ　…聞き手に対する特別な働きかけを持たない文末表示。発話中における軽い休止。したがって対句的表現の前段の文末にもよく使われる。

ウズル…話し手の単なる意志・推量判断を表すだけでなく，言い納めを強く表示する。聞き手への強い働きかけを持ち自分の一連の発話の終了を表示する。待遇表現上は，話し手が聞き手よりも上位の場合，荘重体的ニュアンスを持ち，話し手が聞き手より下位の場合，丁寧・かしこまりのニュアンスを表す。

5　マイとマジイについて

次に否定推量の助動詞マイとマジイについて論ずる。マ(ジ)イは，次に掲げる諸例のように，中世末期においてウズ(ル)と肯定⇔否定の関係で対になって使われている助動詞である。そして，ウズにウズルという別形が存在するように，マイにもマジイという別形が存在している。

[ウズ(ル)とマ(ジ)イが対になっている例]

・…一生ノタノシミ満足セウズ此ニスギタルコトアルマイト云タソ（玉塵抄巻二(1)p175）

・我は今より各々に一味をいたすまい。ただ人間と入魂をせうずると言うて，…（キリシタン版エソポ物語　p453）

・そなた一人のにはせまじい。ただこれは二人のにせうずと。（キリシタン版エソポ物語　p481）

・語つたらば，政頼であらふず，語らずは，政頼では，あるまひと云（狂言六義　政頼）

・定めて，（内ニハ）あるまひ，都には，あらふず，急ぎ買うて来いと云（狂言六義　鎧　p315）

・こなたは，経陀羅尼は，御存じてあらふず，雪の法度は，御存じて，あるまひと云（狂言六義　雪打合）

・お目が参つたらば，お見参であらふず，お目が参らずは，五日も十日も，お見参であるまひと云て，…（狂言六義　秀句唐笠　p357）

ここで問題としたいのは，マイとマジイとの共存の在り方であるが，次に掲げる狂言とキリシタン資料の用例分布の数値表からもうかがえるように，マイとマジイの間には，終止法ウズとウズルの間に見られるような発話中と発話末の顕著な差は見られない。(注5)

表③　狂言資料におけるマ(ジ)イ〔マジ(キ)を含む〕の分布

語形	用法		虎明本用例数	狂言六義用例数
マジ	終止用法	発話途中文末	13 (10)	13 (7)
		発話末	(3)	(6)
	終助詞類への接続（～ヤ）		3	0
マジキ	終止用法	発話途中文末	1 (0)	1 (0)
		発話末	(1)	(1)
	終助詞類への接続（～カ，～ゾ）		2	1
	連体用法（名詞修飾）		1	0
マイ	終止用法	発話途中文末	543 (179)	166 (50)
		発話末	(364)	(116)
	終助詞類への接続（～ゾ，～カ，～ヨ，～ナ，～マデ，～ナド）		230	32
	連体用法（名詞修飾）		15	2

マイ	接続助詞類への接続（～ホドニ，～ガ，～モノヲ，～ニ，～トコロデ，～モノ，～シ〈並列〉，～ト）		153	31
	準体用法		14	5
マジイ	終止用法	発話途中文末	25	16	13	9
		発話末		9		4
	終助詞類への接続（～ゾ）		8	0
	接続助詞類への接続（～ホドニ，～ガ）		4	1

＊調査範囲…虎明本狂言＝全巻，狂言六義（天理本狂言）＝上巻

表④　キリシタン資料におけるマ(ジ)イ〔マジを含む〕の分布

語形	用法		エソポ物語用例数		平家物語用例数	
マジ	終止用法	発話途中文末	0	0	2	0
		発話末		0		2
	終助詞類への接続（～ゾ）		1		0	
	連体用法（名詞修飾）		0		3	
マイ	終止用法	発話途中文末	13	6	65	27
		発話末		7		38
	終助詞類への接続（～ゾ，～カ）		4		10	
	連体用法（名詞修飾）		0		8	
	接続助詞類への接続（～モノヲ）		1		0	
	準体用法		0		1	
マジイ	終止用法	発話途中文末	26	7	61	23
		発話末		19		38
	終助詞類への接続（～ゾ，～カ）		4		3	
	連体用法（名詞修飾）		2		9	
	接続助詞類への接続（～モノヲ，～ニ，～ケレドモ）		4		5	
	準体用法		0		2	

＊調査範囲…キリシタン版エソポ物語・キリシタン版平家物語ともに全巻調査

表③の狂言資料の数値を見る限り，マイが発話末に，マジイが発話途中文末に使われる傾向があるようにも見られるが，表④のキリシタン資料では，その

ような傾向も読み取ることができない。実際の個々の用例にあたってみても，マイとマジイの間に，ウズとウズルにおけるような談話機能の違いを見ることは難しいのである。

結論から言えば，ウズとウズルとは違い，マイとマジイとの差異は，マイが発話主体の主観的否定推量に主眼がおかれるのに対して，マジイは客観的な実現可能性の否定ないし倫理的禁止に主眼が置かれる，という差であると考えられる。

小林1987は，

「まい」の変化形「まじい」は，狂言では，名のりや改まった場面での使用が目立ち，「まい」より発話者の強い意志・決意・推定の姿勢がうかがわれる。(p.27)

と言う。実際，狂言資料でマジイの使用が目立つものに高札の文面におけるマジイの使用が挙げられる。そしてこの場合次の例のようにウズルとの共用が見られ，高札として掲示されるような文章の文体としてマジイ形が選択されていることがうかがわれるのである。

・…げいのふのあるものを，聟にとらふとぞんずる，まづ高札をうたふ…主にはよるまじひ，何にても一げひあらふずる物を，聟にとらふずると申て，高札をうつたと申が，…何々主にはよるまじひ，一げいある人をむこにとるべし，…（虎明本　八幡の前）

上の例，高札を立てた者の言葉をなぞったところでは「聟にとらふずる」となっているのが，後の高札の文面をそのまま読むところで「むこにとるべし」となっていて，口頭語のウズルが書記言語ではベシに対応しているのだが，一方マジイの方は両方ともマジイの形である。しかし，次の例では，高札の文面とその意を取った口頭の表現との差としてマジイとマイが対比的に使われている。

・誰には依るまじい，歌道の主を，聟に取らうと，高札を，打たれたと申，…（中略）…高札にも，記すごとく，どなたには依るまい，歌道の，達した人を，聟に，取らうと申事じや，（狂言六義　角水）

このようなマイとマジイとの間には，比較的“重々しい”マジイに対する比較的“軽い”マイという微妙な差異が存在するとは思われるものの，ウズとウズルのような談話機能表示に関わる使い分けとはやはり異なるものと言えよう。

キリシタン資料におけるマイとマジイの使い分けもあまり明確でないが，例えば，

・「そちと問答をするならば，終り果てがあるまい。まづその方は何事を知っ

たぞ」と言へば，…（エソポ物語　p414）

・「この難儀を救ひお助けあらうお方は，その方より外はあるまじい。この難をお助けあらば，水と魚のごとく親しみまらせう。…」（エソポ物語　p447）

上の2例はよく似た使われ方をしているが，マイの方が尊大な口調であるに対し，マジイはへりくだった文体の中で使われている。矢島1993bは，『天草版平家物語』でのマイとマジイとの差について，

マジイのマイに比した場合の最も特徴的な点は，話手が相手である存在との個別的な対応を認識する中で生じた表現で使用されていたという点である。…（中略）…対照的に，マイは特定の存在への意識というものとは特に関わりがない発話に使用される。（p.92～93）

と言う。上の待遇表現上の差異も矢島1993bの言うような使い分けの結果としてこのような形で現れているのかもしれない。

キリシタン資料の場合，次のように，日本語教科書としてマイとマジイと意図的に近接して出されているかと思われる例も見受けられる。

・…天の御加護あらば，君もおぼしめしなほすことなどござるまじいか？君と，臣とをならぶるに，親疎わくかたなく：道理と，僻ことをならぶるに，いかで道理につきまらすまいか？（平家物語　p47）

・このおん馬を賜はりながら，宇治川の先を人々にせられてござるものならば，軍にあふこともござるまい，ふたたび鎌倉へ向っても参るまじい：（平家物語　p231）

6　マイとマジイについてのまとめ

先行研究の指摘と用例の検討を踏まえ，筆者が考えるそれぞれの形態が表示する機能の違いは，おおむね次のようにまとめられる（なお，以下に述べる使い分けは連体用法・終止用法両者に共通していると考えられ，この点でもウズ⇔ウズルとは異なっている）。

マイ　…話し手の判断としては比較的軽い否定推量の判断を表す。物事の非実現性の客観的表現よりは話し手の主観的判断の表示に重点があり，聞き手に対する働きかけは比較的弱い。

マジイ…比較的重い否定推量の判断を表す。話し手の主観的判断というよりも物事の非実現性や「あるはずがない」「あってはならない」という当

為性の表示に重点がある。聞き手に対して強い禁止となる場合がある。待遇表現上は，話し手が聞き手よりも上位の場合，荘重体的ニュアンスを持ち，話し手が聞き手より下位の場合，丁寧・かしこまりのニュアンスを表す場合があるが，ウズルのように発話の終了を強く表示する働きはない。

7 おわりに

本稿の中心的な興味は，終止用法のウズとウズルを談話機能の面から議論することにあった。その結果，ウズは発話途中の文末に，ウズルは発話末の文末に用いられる傾向が強いことを指摘した。この傾向自体は，用例の数値から明らかであるが，これを談話機能の違いと解釈することの有効性をより強く主張するためには，本来，文献上の発話途中文末と発話末文末の違いの有無をもっと一般的に検証する必要がある。本稿ではそこまでの検証をデータとして示してはいない。実はそのようなデータを単純な統計的数値として示すことは難しいのである。本稿が調査対象とした文献（狂言資料・キリシタン資料）における文末形式を計量調査してみると，発話途中文末にしろ発話末文末にしろ，いずれも，指定の助動詞ヂャ・終助詞ゾ・動詞命令形（命令文）・過去の助動詞タ・疑問の終助詞カ（疑問文）等で終わる文末形式が多数を占める。ウズ（ル）以外に発話途中文末と発話末文末とが異なる形式を統計的数値の上に見いだすのは難しいのが現実である。したがって，本稿においても，いたずらに他の文末形式と比較する作業は行わず，ウズ(ル)の検証のみに議論を止めた。また，ウズ（ル）のようないわば短縮形と非短縮形（この呼び名はそれぞれの形態の違いを単純に比較した仮の呼び名で，それぞれの形態の成立のしかたによったものではない）の〈ゆれ〉を持ち，意味的にも対をなす，マ（ジ）イとの対比をもって，ウズ（ル）の使い分けの特殊性を示そうとしたのである。

〈注〉

（1）　この立場については坪井1999において批判的見解を述べた。
（2）　調査には，池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇』（表現社），北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』（勉誠社）を用い，適宜複製本によって確認した。なお，『狂言六義全注』では原本で巻末にまとめられている「抜書」を該当する各曲の後に配置している。そのため，本稿においても，調査範囲である上巻部分の中に「抜書」の部分も含めて計量調査している。
（3）　調査には，大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』（臨川書店），亀井高孝・阪田雪子『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』（吉川弘文館）を用い，適宜複製本によって確認した。
（4）　この連体ウズ4例のうち3例が「～ウズコト」と形式名詞コト（事）に続く例であることは，狂言資料における連体ウズの例がやはりコトに続く例であったこと（第2節）を考えあわせると，当時コトのような形式名詞に続く場合の特殊な接続形式として連体ウズが固定化していた可能性も考えられる。
（5）　少数例見られるマジ㈜については議論を省略する。これらマジ㈜類は基本的に文語的表現と考えられるが，「キリシタン版平家物語」に見られる連体用法のマジ3例のように単に文語的表現としてすまされないものも含まれている。

〈参照文献〉

安達1972a　安達隆一「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について(一)—いわゆる原拠本との比較を通してみた—」『解釈』昭和47年2月
安達1972b　安達隆一「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について(二)—いわゆる原拠本との比較を通してみた—」『解釈』昭和47年8月
大塚1956　大塚光信「ウズとウズル」『国語国文』第25巻9号　昭和31年9月
大塚1960　大塚光信「ベシとマイ」『国語国文』第29巻7号　昭和35年4月
大塚1962　大塚光信「助動詞マイの成立について」『国語学』第50輯　昭和37年9月
大塚1966　大塚光信「抄物とその助動詞三つ」『国語国文』第35巻5号　昭和41年5月
大塚1995　大塚光信「鶏肋三題」『梅花女子大学紀要』第29号　平成7年12月
大塚1996　大塚光信『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版　平成8年4月（上記大塚1960，1962を再録）
京1995　京健治「「ウズ」「ウズル」」『国語国文』64巻2号　平成7年2月
小林1987　小林千草「近代語の文法—鎌倉室町時代語—」『国文法講座5時代と文法—近代語』明治書院　昭和62年6月
迫野1990　迫野虔徳「「ウズ」について」九州大学文学部『文学研究』87輯（奥村三雄教授・松田伊作教授退官記念特輯）平成2年3月
菅原1992　菅原範夫「「うず」の消滅過程」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院　平成4年3月
高見1990　高見三郎「『杜詩続翠抄』の「マジイ」「ベイ」」『女子大国文』107　平成

2年6月
坪井1986　坪井美樹「助動詞の語形変化と活用形—中世後期を中心として—」『日本語と日本文学』第6号　昭和61年11月
坪井1999　坪井美樹「ムズ（ル）からウズ（ル）へ—終止法ウズは旧終止形の残存か？—」『文芸言語研究』36　言語篇　平成11年10月
中出1965　中出惇「天草本伊曽保物語における助動詞「ウ」と「ウズ」について」愛知大学『文学論叢』28　昭和40年3月
蜂谷1971　蜂谷清人「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形・用法に関する一考察—狂言台本を中心に—」『国語学』86集　昭和46年9月（蜂谷1977に再録）
蜂谷1977　蜂谷清人『狂言台本の国語学的研究』笠間書院　昭和52年12月
細川1979　細川英雄「『天草版平家物語』における否定の表現形式と用法について（上）」『信州大学教育学部紀要』41　昭和54年11月
矢島1993a　矢島正浩「天草版平家物語における打消推量・打消意志の助動詞—資料性との関わりを中心にして—」『愛知教育大学研究報告』第42輯人文科学篇　平成5年2月
矢島1993b　矢島正浩「天草版平家物語におけるマジイ・マイの用法」『国語国文学報』第51集　平成5年5月
山内1964　山内洋一郎「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』第23巻3号　昭和39年8月（山内1989に再録）
山内1989　山内洋一郎『中世語論考』清文堂　平成元年6月
山内1997　山内洋一郎「助動詞「うず」の終止・連体形について—中世における終止形の残存—」広島文教女子大学『文教国文学』第37号　平成9年8月
山田1972　山田潔「推量の助動詞「う」「うず」「うずる」の一考察—キリシタン資料における実態—」『学芸国語国文学』昭和47年11月
山田1975　山田潔「史記抄における助動詞「ウ」「ウズ」の考察」『国学院雑誌』昭和50年7月
山田1991　山田潔「助動詞「ウズ」の表現性」『国語国文』60巻6号　平成3年6月
山田1998　山田潔「『玉塵抄』の助動詞「ウズ」」『学苑』第694号　平成10年1月
湯沢1929　湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』大岡山書店　昭和4年12月（当初の書名は『室町時代の言語研究』。後に風間書房より現行書名で再刊）